

季刊
じぱ

Japan Intellectual Property Association

理事's eye

森 達也 日本知的財産協会 副理事長(2022年度)
三菱重工業株式会社 知的財産部長

わが社のこだわり

株式会社アシックス

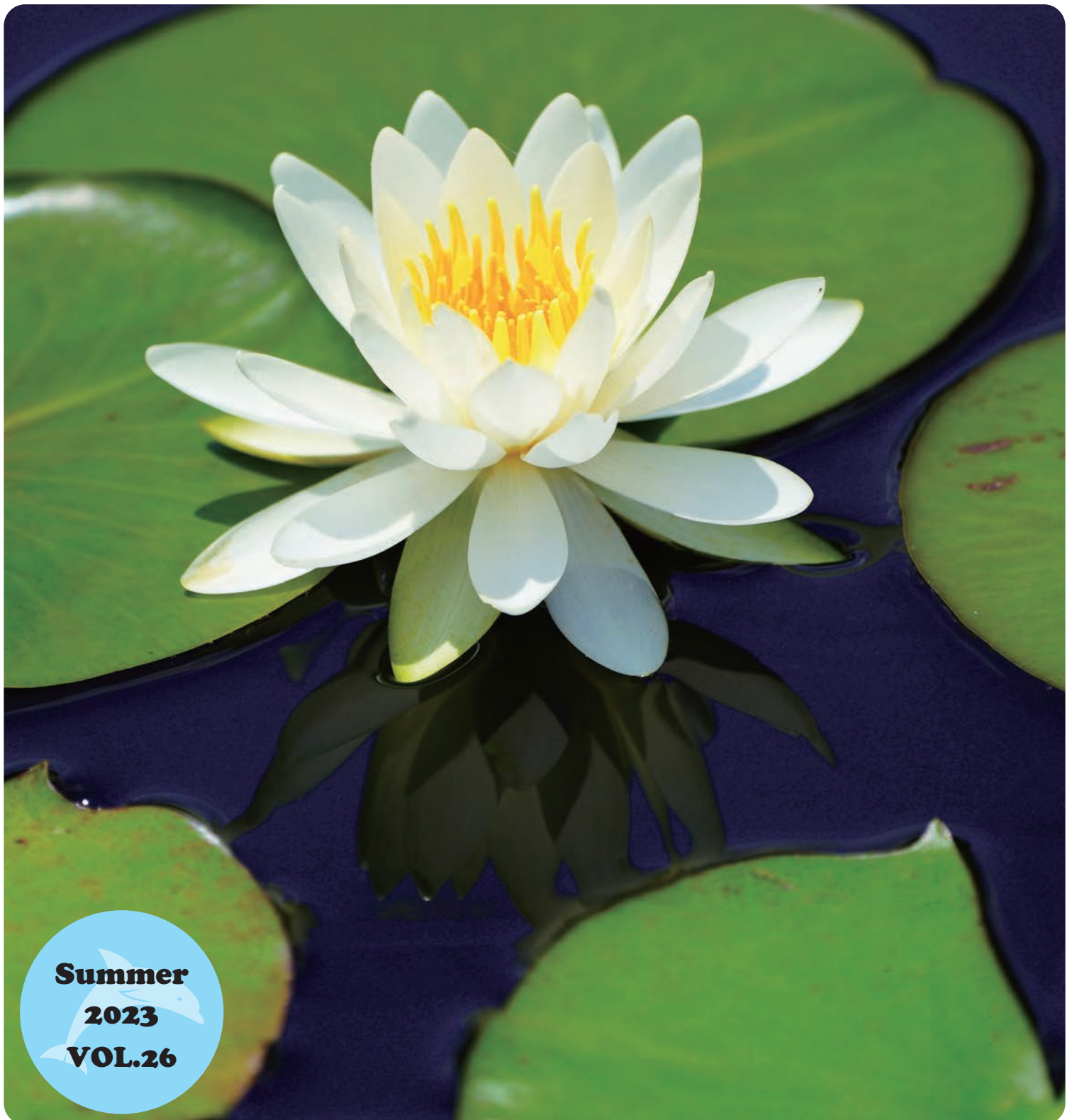
健全な身体に健全な精神があれかし

ZOOM UP

有識者連携ワーキンググループ

JIPA通信

総会での定款変更について



Summer
2023
VOL.26

ワタシのJIPA、JIPAのワタシ

企業の知的財産部門に配属されて、知財のイロハを最初に学んだのはJIPA研修ではないでしょうか。AコースやBコースで知財制度の基礎を学んだり、ベテラン知財講師から知財実務の話聞きよく判らないなりに感心したりしたものと思います。ワタシにとってのJIPAは、JIPAから知財制度や実務を学ぶところから始まります。JIPA研修は入門から中級・上級、更には、研究コースや海外コースもあります。知財関連の知識や実務を体系的に習得することができる教育プログラムはJIPAならではの、他国に類をみない素晴らしいものです。

また、研修では物足りなくなってきた頃には、委員会活動も更に大きく成長できる貴重な機会です。各社から集まった知財

専門家が課題を見つけて情報収集や議論を重ねて切磋琢磨することにより、自分では気付いていなかったことや、自分とは異なる考え方を知ることができ、専門家として固まりつつある考え方を柔軟にし、更に高めることが出来る場となります。知財競争力は、企業での研究開発や設計、そしてそれらを権利に仕立てる知財活動の賜物ですが、JIPAがあることで、この知財活動の基礎が築かれているといっても過言ではありません。

それだけでなく、委員会活動では、自分達が調べ纏めたことを、論説として協会誌等に掲載することも出来ますし、また、特許庁他との意見交換や国内外政府等からのパブリックコメント募集に対して意見書を提出する機会にも恵まれます。学び吸収

してきたものを、今度は、自分の考えとして、所属企業の考えとして、そして、JIPAの意見として出していくことにより、知財価値を高めることが出来ます。

論説を載せるだけでは物足りない場合は、教育プログラムの講師となるチャンスもあります。JIPAとして活動していくことにより、JIPAを益々よいものにしていくことができ、それが、自分の企業の知財活動や若手教育を支えていくことになっていきます。つまり、JIPAのワタシとして活躍できる。ワタシの成長はJIPAの発展でもある。ワタシのJIPAからJIPAのワタシへ、自分自身もJIPAも成長していく。この循環こそがJIPAであり、日本知財業界のコアコンピタンスです。それを生み出しているのがワタシであると。



「JIPA理事としての視点」 「知財部門のリーダーとしての視点」 2つの視点で深掘りする知財業界の今

森 達也

Tatsuya MORI

日本知的財産協会 副理事長(2022年度)

三菱重工業株式会社 知的財産部長

ミライの知財、知財のミライ

知的財産制度の歴史は、産業発展の歴史。中世に欧州で誕生した特許制度は、産業や交易の発展に伴い発展してきました。日本でも明治時代の産業発展に合わせるように特許制度ができ、今日に至るまで種々の制度や手続きが整備されてきました。一方で、自国産業の成長促進や国民の安全・健康等に考慮して特許を制限することもあります。例えば、日本では1970年代までは物質特許が認められていませんでした。また、第二次産業から第三次産業に移るにつれて、或いは、コンピューターの発展とともに、ビジネスモデル特許が現れたり、著作権で保護したりといったこともありました。逆に、産業自身の競争力が低下すると、これを知財でカバーしようとプロパテント政策等が取ら

れたこともあります。

では、ミライの知財はどう取れば良いのでしょうか。歴史が示しているように産業がどのように発展するかにかかっています。また、自国の産業が最先端を走っているのか、後追いなのかにもよって将来は変わってきますし、市場とする国によっても変わってくると思います。自社の製品事業そのものやそれを取り巻く産業の発展や衰退によっても変わってきます。パテントプールや標準必須特許の扱いもわかり。世界情勢をも加味して自社の事業計画や業界の動きを予測し、その予測を日々の出願・権利化に盛り込んでいくことがミライの知財への備えになります。

一方で、知財のミライはどうなるでしょうか。それは、先に考え動いた人の勝ち、

知財のミライは作ったもの勝ちです。ミライの知財を取得していくことも大切ですが、先回りして知財制度を変えてしまえば、最後尾からいきなり先頭を狙うことも可能になります。データやAIの時代では、特・実・意といった産業財産権は無用の長物になるかもしれませんし、逆にデータやAIに左右されないクリエイティブな部分が残るのかもしれません。よくよく考え、誰よりも早く制度を創っていくことが知財のミライです。制度創造は、一企業だけでは難しいかもしれませんが、そんなときこそJIPA。知財のミライをJIPAの仲間と共に考え創造していきませんか。JIPAのワタシとして、ミライの知財を考えてみてください。

わが社のこだわり [株式会社アシックス]

健全な身体に健全な精神があれかし

下村 幸治 Koji SHIMOMURA

株式会社アシックス 法務・知財統括部 知的財産部長



1949年の創業以来、アシックスは創業哲学である「健全な身体に健全な精神があれかし “Anima Sana In Corpore Sano”」のもと、さまざまなスポーツ用品を提供してきました。アシックスのビジョンである「スポーツでつちかった知的技術により、質の高いライフスタイルを創造する」にもあるように、私たち事業の競争力の源泉は技術であり、世界の人々が健康で幸せな生活を実現できる製品やサービスを提供するために、最新の技術を用いて事業に取り組んでいます。VISION2030の1つのテーマである「デジタル」分野では、無料会員サービス「OneASICS」を中核としたランニングエコシステムの構築により、スポーツを愛する方々を中心にあらゆるステークホルダーにとって価値ある製品・サービスを提供し続けていきます。

アシックスの取組み

アシックスでは、「VISION2030」の実現に向けた「中期経営計画2023」の中で、デジタル戦略を戦略目標の一つに掲げています。この戦略の中核となる「ランニングエコシステム」においては、マラソンなどのレース登録、センサー技術を使っのコーチング、ランニングスタイルとスマートフォンで撮影した足の画像からその人に相応しいシューズを推薦、などのデジタルサービスを有機的につなぎあわせることにより、ユーザーの方々の利便性と健康に貢献することを目指しています。

また、人々が健康に過ごすためには、地球環境を守らなくてはなりません。アシックスは、2019年にスポーツメーカーとして世界で最初に「気候関連財務情報開示タスクフォース」提言への賛同を表明しており2030年までに①全事業所の使用エネルギーを100%再生可能エネルギーに切り替え、生産委託先工場でも再生可能エネルギーへのシフトを進めています。②またランニングシューズの新製品の9割以上にリサ

イクル素材を採用する循環型のモノづくりも進んでおり、最終的にはすべての主要素材であるポリエステルを100%リサイクル材となるよう、取り組みを続けています。

アシックスの知財活動

VISION2030が定める3つのテーマ「デジタル」「パーソナル」「サステナブル」の推進に向け、イノベーション創造と知的財産戦略の強固な連携を実践しています。事業における競争優位性を確保するため、IPランドスケープを活用した戦略の提案などを通じて知的財産の戦略的取得・活用を経営戦略に落とし込み、企業価値の向上を図る「知財経営」を実践しています。また令和2年には、模倣品対策活動が認められて知財功労賞を受賞しましたが、「アシックス」というブランドが究極の知的財産と考えており、「知財経営」の実践がブランドの保護、ブランド価値の向上、ひいては企業価値向上に戦略的に貢献するとの認識の下、今後も知的財産戦略の強化を目指していきます。

「知財経営」の推進のために2020年に立ち上げた、全社の経営幹部をメンバーとするCEO直轄の諮問機関「知財戦略委員会」は、アシックスの知的財産戦略をレビューし、将来あるべき姿、現在

の課題及び今後進むべき方向性を議論する会議体として有効に機能しています。

アシックスの主要ビジネスであるランニングカテゴリーでも戦略的に知的財産を活用しています。トップアスリート領域での頂上奪還を目指すCEO直轄の「Cプロジェクト」には知的財産部員も参画しており、このプロジェクトから生まれた「METASPEED」シリーズは、特許・意匠・商標を組み合わせた知財MIXにより保護されています。今後も、イノベーション創造から生まれた新たな製品・サービスについて、さまざまな観点から知的財産戦略を検討していきます。



JIPAへの関わりと期待

アシックスでは、積極的に知財部員の各種JIPA専門委員会への委員派遣を行っています。委員会活動では、専門知識の習得だけでなく、ネットワーク形成や部員の視野拡大に大いに役立っています。また、知財部員だけでなく研究開発部門からも多数JIPA研修を受講しており、発明創出活動に役立てています。これらは非常に貴重な機会であり、引き続き、JIPAの活動に関与していきたいと考えています。





有識者連携ワーキンググループ

浅井 俊雄 日本知的財産協会 有識者連携ワーキンググループ リーダー
Toshio ASAI 日本電気株式会社 知的財産部門 シニアプロフェッショナル



高度化する知財課題に向けたJIPAのナレッジハブを目指す！

有識者連携ワーキンググループは、2022年9月度の理事会で承認された新設のワーキンググループ(以下WG)です。活動の母体は、旧WIPOプロジェクトに設置されていた有識者との懇談会です。この懇談会では、高倉成男名誉教授(明治大学)、山内勇准教授(明治大学)および竹中俊子教授(ワシントン大学、慶應義塾大学)を囲んで、知的財産に関する時事問題や先生方の研究成果をテーマとした意見交換を行い、JIPAが取り組むべき政策課題の発掘や検討をしてみました。

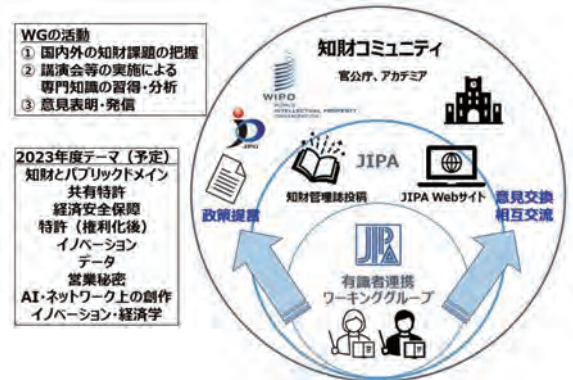
アカデミアを中心とする有識者は、問題を体系的に分析し、解決の道筋や将来への展望を示そうとしています。メタバースやAIなどのデジタル化による社会の変化、また、環境問題や感染症対策などの地球規模の問題を前に、知的財産に関連した国内外の政策課題も高度化・多様化していますが、有識者はこれらの現代的な課題に敏感に反応し、それぞれ

の専門分野の研究で積極的に取り上げています。このような有識者の知見を理論的なバックボーンとすることで、JIPAの政策提言に一層の説得力を加えることができます。

このような背景から、新たに発足した有識者連携WGでは、これまでの3名の先生方に加え、JIPAが注目するテーマに精通した有識者を、外部から幅広くお招きして意見交換を行っています。2022年度は、特許の価値評価、NFTと意匠権、政策策定プロセスとアカデミア、非公開特許制度、知財活動の組織体制、営業秘密侵害、特許制度と薬事法制、特許活動に関する開示情報などの多様なテーマについて、代表的な先生方をお招きいたしました。

2023年度は、JIPAの中長期的な活動に有益な知見を得るために、より

フォーカスしたテーマについて第一線の有識者との連携を深めるとともに、データなどの特定の分野においては政策提言の立案や意見発信にも挑戦をしてみたいです。また、有識者の企業実務への理解と関心を高め、アカデミアとJIPAが共に成長する場として発展させることで、次世代のオピニオンリーダー育成の一助となることも期待しています。JIPAの幅広い方々のご意見を参考にして企画をしてみたいので、お気軽にお声をかけてください。



JIPA通信 総会での定款変更について

本年5月26日に開催された定時社員総会は、4年ぶりに参加型での実施となり、懇談会を含めて多くの会員の皆様にご参加頂きました。本総会では定款の一部変更を行いましたので、その内容について説明致します。

昨今、私たちを取り巻く国内外の環境は急激に変化していますが、こうした変化を捉えて臨機応変に協会活動を推進するためには、専門委員会などの会務運営機関が機動的に活動できるようにする必要があります。こうした観点から、会務運営機関に関する具体的な事項は定款ではなく会務運営規程に定め、理事会決議によって変更できるようにしました。またプロジェクトについては、今後も継続的に活動していくという趣旨から、その名称を「ワーキンググループ」に変更しました。

このように、変化に応じた活動を展開することで、当協会のプレゼンスを一層高めていきます。

表紙の写真は…

「睡蓮からAIや知財に思いをはせて」

会誌広報委員OB
森田 圭二

「睡蓮」の語源は、陽射しが弱まると早々に花を閉じて眠ってしまうように見えるため、「眠る蓮」から「睡蓮」となったようです。ところで、睡蓮といえば、クロード・モネの「睡蓮」が有名ですが、その中の「睡蓮、柳の反映」が、2016年、第二次世界大戦中の疎開から約60年ぶりに上半分が失われた状態で発見され、作品が寄贈された国立西洋美術館によって、全体の白黒写真とモネの作品を学習させたAIが推定した色彩を基に「復元」されました。

膨大なデータの活用を得意とするAIは、知的財産分野でも利用が進んでおり、その対応に備えることが必要かもしれません。

本誌では、季節感があり、技術、特許、知財に関連がある表紙写真を募集しています。写真と説明文を会誌広報グループ kikansi@jipa.or.jp宛てにお送りください。また、取り上げて欲しいテーマがあれば、お気軽にご連絡ください。

季刊じば Vol.26
SUMMER 2023
2023年7月15日発行

編集人： 一般社団法人 日本知的財産協会 会誌広報委員会
発行人： 一般社団法人 日本知的財産協会内 上野 剛史
<http://www.jipa.or.jp/kikansi/jipa.html>
印刷&DTP： NPC 日本印刷株式会社